資料２－２

第４期草津市地域福祉計画策定に向けた

ワークショップ結果

―　報告書　―

テーマ：『包括的な支援について』

令和２年７月

草津市

１．概要

（１）目的

ワークショップにより市民の意見を吸い上げ、現在策定中の「第４期草津市地域福祉計画」の施策・事業への反映に資する内容となることをめざしました。

（２）実施日程

【１日目】7 月 13 日（月）18:30～　草津市役所８階　大会議室
【２日目】7 月 14 日（火）18:30～　草津市役所８階　大会議室

（３）対象者

福祉関係団体などの、地域福祉や地域に根ざした活動をしている方や地域福祉に興味・関心のある市民

【１日目】３２名
【２日目】３２名

（４）運営の手法

テーマに沿って各テーブルで検討を行いました。各テーブルのリーダーは意見の集約を行い、最後に発表していただきました。

（５）グループワークの内容

【１日目】「高齢者、障害者、子ども・子育て、生活困窮者等への支援として共通に　取り組めること」のうち、３つの取組について、特に「互助」と「公助」の視点から検討しました。

【２日目】包括的な支援のうち、３つのシチュエーション（「複合的な課題を抱える家族への支援」、「引きこもりの相談支援」、「参加支援」等）の事例を引用して、対応策を検討しました。

（６）その他

新型コロナウイルス感染症対策として、参加者を絞った形（40 名以下）で実施しました。また、会場設営や運営においてもマスク、アルコール消毒薬、検温器を設置する等、新型コロナの感染予防に努めました。

２．全体の流れ

【１日目】

	時間		内容
開会	18:30～	5 分	主催者の代表あいさつ
オリエンテーション	18:35～	20 分	①地域福祉計画の説明 ②今回のワークショップの趣旨説明 ③各テーブルでの自己紹介、リーダー決め
グループワーク	19:00～	55 分	◆「高齢者、障害者、子ども・子育て、生活困窮者等への支援として共通して取り組めること」について、「相談支援」、「見守り」、「居場所づくり」の３つの取組を検討。
各テーブルの成果発表	19:55～	25 分	◆検討した取組のうち、任意の１つを挙げて、対応策とその結果をテーブルの代表者が発表。
本日のまとめ・閉会	20:15～	5 分	コンサルによるまとめ

【２日目】

開会・１日目の確認と、２日目の内容について	18:30～	20 分	①１日目の振り返り ②地域共生社会推進検討会「最終とりまとめ」（概要）で示されている包括的支援や多様な参加・協働の推進の事例について説明 ③各テーブルでの自己紹介、リーダー決め
グループワーク	18:50～	60 分	◆３つのシチュエーション(※)を例示し、そのうちの２つのシチュエーションについて、対応策を検討。
各テーブルの成果発表	19:50～	25 分	◆検討したシチュエーションのうち、任意の１つを挙げて、対応策とその結果をテーブルの代表者が発表。
本日のまとめ・閉会	20:15～	10 分	コンサルによるまとめと、主催者によるあいさつ

※「最終とりまとめ」（概要）に示されている「複合的な課題を抱える家族への支援」、「引きこもりの相談支援」、「参加支援」等の事例を引用して検討しました。

３．ワークショップ風景

４．各テーブルの成果発表

（１）１日目

■「相談支援」（互助の視点から）

○互助について、近隣や自治会が実際機能していないという問題があり、民生委員の成り手がいない、ボランティアの方もなかなかおらず、また高齢化が進んでいるというところが問題となっている。
○最近では個人情報の関係で、なかなか踏み込んだことができないことが課題。
○人材不足が一番の課題であるという話があり、どのようなことができるかというところで、地域のコミュニティや自治会等を活用し、住民の方同士で場所作りをしていき、そしてそこから行政につなげていくのが必要ではないかという意見があった。
○住民の方についても、困ったときにどんな制度があるのかというのを知るための勉強会等、何か参加する機会があればいいという意見があった。
○最近はプライバシー等、神経質な時代になっているので、隣の方との関係を作るにしてもなかなか難しいような状況がある中で、それでもつながりを作っていかなければお互いの関りを持つきっかけもなかなかない、どうしたものかと話していた。核になる人がいるとすれば、民生委員という名前があがってきた。地域の色々な世帯、家庭の中に関わっていけるような方であって、なおかつ色々な地域の関りを広げる役割も担っていただけることができれば地域全体にそういった関係性が広がっていけばいいという話があった。
○高齢者は増えてくるが、元気な高齢者の方も見守る立場で活躍できるような、そういう環境づくりに向けた取組も大事だというのも出た。
○近所の関係を構築するという中で、必ずしもそれが良い方ばかりに転じるという訳ではなく、相手に対し好意ではあると思うが、決め付けたり、思い込みだったり、先入観を伴うような、一方的にもなりえるような支援というのは当事者からすると望ましいものでなく、受け入れにくいこともあるのではないかという意見もあった。
○障害者の方の相談できる場所がない、近所付き合いが薄い。一番困っているのが民生委員の成り手が少ない、ボランティアの成り手がない、地域の中で引っ張るリーダーがなかなか出てこないので、そういったところを考えていかねばならないという課題があがった。
○近所付き合いもそうだが、言える人はそういうところがあればいいが、地域の方や人生経験が豊富な先輩方などにアドバイスを聞ける場所があればいいと思う。
○関心を持ってもらう人を増やすというところも重要であり、身近な人で対象者がいれば興味が出てくるので、そういうところは呼びかけや啓発の必要も出てくるという意見もあった。

○新しい何かを作れば全部解決という議論ではなかった。むしろ既存のもの等を使いやすく、とっつきやすくして、身近に気軽に感じてもらえるようにすればある程度対応できるのではないかという議論が主流だった。例えば、どこどこの○○さんといった形で、色々なところに顔がきき、知ってもらえる、といった形の相談支援体制が作れるとより多くの方に対応できるという議論だった。

○現在、高齢者、障害者、困窮者の方々等の相談を、「ちょっと安心相談所」という形で実施されているが、「相談します」という形で開設しても相談に来る方が少ない。実際、転入者が多い草津市という指摘が一方であり、民生・児童委員はいるが、誰がどこにいるのかという承知してない方が多い。

■「相談支援」（公助の視点から）

○公助について、市役所に相談に来る方は問題ないが、来ることができない方や引きこもりの方等そういった方に対するアウトリーチの充実が必要で、自分からなかなか発信できない人、声があがらない人への対応の仕組みを作っていかなければならないという話があった。

○市役所に来た際にも、窓口対応が職員の経験年数等によって異なってきたりもするので、職員のレベルを上げないといけないという話もあった。市役所は部署が非常に多いが、なるべく他の課の制度でもあっても一定説明できるような理解をしっかりしていく必要がある。

○一方的な好意や善意が相手方にとっては迷惑や受け入れがたいこともあるので、その方が置かれている境遇、それまでの背景等をしっかりと受け取り相談を受けられる方がいることが大事という意見が出た。

○公助については、相談と言っても「何かありませんか」と言っても出てくるものではなく、コミュニティや信頼関係の中で出てくるので、そういう役割を市役所等が上手く公助でつなげることができればいいという意見があった。

○公助は最後の砦だということをしっかりと思って動いてほしい。福祉的相談はどこにしたらいいのか、どうやってしたらいいのかというのが分からないところがあるので、総合的な窓口を作り、相談しやすいよう敷居を下げるという意見も出た。

○地域の情報というのは高齢者や障害者へ入ってくるというのはあまりないので、行き渡るようにしてほしいという意見もあった。

○行政に対して相談をしに行くのはハードルが高いが、複雑な相談等に関してはしっかりと受けてほしいという話があった。

○どういうことをどういう場所でどういう方が相談しているのか、直接把握したり見に来てもらうような仕組みがあれば、より公的な施策に生かせるのではないかという指摘があった。

■「見守り」

○日常の中であいさつ、関係づくりが大切だという意見があった。なかなか知らない人に声をかけるというのは難しいかもしれないが、「今日もこの人ここにいるな」といった意識を向け、勇気をも持ってあいさつができたらいいと思う。
○意識づけになるが、日常の中で、いつもと少し違う景色に気づくといった視点も必要ではないかという意見もあった。１日１分外を見て、「今日もここの電気が点いている」「今日ここに人が通っている」「犬の散歩をしている人がいるが昨日はいなかった」等、そういった小さな点に気づくことが大切。
○一人でできることもあれば、そうでないこともあるので、チームでできることは関係を作った上で、そういう方たちと取り組むという仕組みも必要。
○個人情報という問題はどうしても出てくるが、「この地域にこういう人がいる」という関係を作った上で、個人情報をどこまで共有し合うのかというルールを決めて、地域全体、行政も含めた関係づくりが必要という意見が出た。

■「居場所づくり」

○単に居場所と言われてもみんなが行けるかと言われるとそれぞれ状況や状態が違うので難しい。足の具合が悪い方、歩いて行ける距離、迎えに来てもらうにも近い距離が必要で、そういう居場所にはそもそも地域ですることのメリット、技術が学べる勉強等、その場所でないとダメというメリットが必要。
○地域の中になかなか溶け込めない人や難しい方もいるので、固定のメンバーでそろえず、不特定の方が参加できるような雰囲気作りも大切ではないか。具体的には町会館の活用をもっと充実させ、活動費等は公的に免除してもらえないか、といった活動資金についての意見が多かった。
○面白い意見として、マッチングアプリも人とつながるひとつのツールとして利用できないか。SNS を通じて一緒に集まるというそういう意見も出た。若い世代の興味をひくという意味でも、こういう視点が大事だと思った。

（２）２日目

■「複合的な課題を抱える家族への支援について」

《検討したシチュエーション》

◆家族構成、各人の状況

父：飲食店を経営していたが、不況により倒産。昼から飲酒し、パチンコに通う生活。
母：家計のためパートを掛け持っている。
息子：高校を卒業後、短い期間に何回も転職を繰り返している。障害の疑いがある。
娘：父親の店の倒産を同級生からからかわれ、現在は不登校。生活リズムが乱れている。

《ストーリー》

娘（中学生）が学校を休みがちとなっていたことから、担任教諭が母に連絡。担任教諭が母と面談したところ、「娘の素行が乱れて夜に遊びに出掛けたり、不登校気味であることを心配している。また、夫や息子のことにも悩んでいる。」とのこと。

◆あなたはどう考える？

この家族が支援を受け、各人が自立・自律した生活を営めるように、また、家族として支え合っていけるようにするには、どのような支援が考えられるか？ストーリーの続きを想像して、どのような形が各人にとって幸せになるのか、想定してみてください。

①この家族にあれば良い、または効果的と思われる具体的な支援について

②父、母、息子、娘のそれぞれがめざすべき「幸せ」の状態について

①この家族にあれば良い、または効果的と思われる具体的な支援について

○父親が飲酒をしてパチンコに通う生活ということで、どれだけ依存しているかを確認して、かなりの依存症なのであれば、まずそこからの支援が必要である。その依存度が趣味程度で働けるようであれば、ハローワーク等に行って仕事を探してもらう。倒産しているので、借金があれば債務整理等の支援が必要だろうという意見が出た。

○父親は就労等の自立につなげることが必要で、そのためにはまずはお酒をやめる。例えば断酒会。治療が必要なのかという所の見極めた上で適切な支援をしていき、お酒やパチンコをやめて就労等の自立につなげるという支援が必要ではないかという意見が出た。

○息子については、障害の疑いがあり転職を何度も繰り返しているので、まず障害の認定により就労の支援が受けられるかどうかを判断する必要があるという意見が出た。

○息子については、まずは障害の疑いをはっきりとさせるため障害の診断をすることが始まりという意見が出た。その後、どのようなサービスにつなげていくのかが見えてくるので、まずは障害をはっきり診断し、そこからサービスにつなげる。例えば、そこから発達支援、発達障害があるのであれば、発達支援センターや各種公的なサービスが明確になり、それが必要な支援先になるという意見が出た。

○娘については、少年センターに相談したり、今学校に行っていないので、根気よく話相手になる方、学校に行きにくいのであれば、とりあえず社会の居場所を見つけることが必要ではないかという意見が出た。

○娘に関しては、不登校等もあるのでスクールカウンセラーや学校が連携をしながら、まずは学校に就学あるいは就労、どういう先に進むのが良いのか、本人の希望も傾聴しながら相談ケースワークをしていくという意見も出た。また、本人にどのような選択があるのかという情報提供も必要で、例えば学校だけでなく、フリースクールやボランティア等の各種サービスの情報提供を行っていき、本人が社会に必要されている、役立つ人間だという理解を促していくという意識付けも必要ではないかという意見が出た。

○母親については、全て抱え込んでいるように見受けられるので、相談相手や悩みを共有できる場所が必要であるという意見が出た。

○母親の支えをしていくことが一番大切で、まずは学校からつながっているので適切な相談支援につながる相談員を案内して支援につなげていくことが大切ではないか。また同じような悩みを持った人とのコミュニケーション、つながりというものを母には必要ではないかという意見があった。

○各人それぞれの支援方法を考えていたところ、各個人に必要な支援を分類したら、精神的な課題や経済的な課題等、多様な課題があり、支援機関も多様にわたるので、家族に対しての支援チームを構成する必要があるのではないかという話に至った。そのためには各支援機関をとりまとめるコーディネーション、野球でいう監督のような役割を担える方、もしくはそういった機関があれば良い。その理由として、こういった複合的な課題を抱えている家庭の場合、例えば父親の悩みを解決するとそれが息子の悩み解決につながったり、もしくはその逆で父親の悩みが悪い方へと転がると息子や娘の状態がどんどん悪くなることも考えられるので、家族全体の支援チームを作りどこがどういう状態であるかをそれぞれが確認し合えるような支援機関を作れるようなものが必要ではないか。またこういったケースの場合は、支援者にかかる重圧が重たくなるので、支援者同士のフォローもでき、成功体験を積み上げて支援の how to の共有も計っていけるような、そういった存在になっていくのが理想だという話が出た。

②父、母、息子、娘のそれぞれがめざすべき「幸せ」の状態について

○父親については、まず働ける年であれば仕事をして、社会的立場・役割の復活をする。
○父親について、医療機関でのお酒の治療あるいは断酒会等の団体に参加し、社会に復帰していく。何より一家を支えてもらうという立場だと思うので、強い意志を父に持ってもらうという意識を変えてもらうという所も同時に必要ではないかという意見が出た。
○息子については、職を転々としているので、適した仕事を見つける。その前に障害があるのであればまず障害の受容というところから始まるのではないか。
○息子については、まずは診断もあるが、自分は何が得意なのかという所を見つけてあげ、居場所あるいはどういった就労につなげるのかを考えることが、この息子の幸せにつながるのではないかという意見が出た。
○娘については、安心できる場所を見つけることと、学校に通えるようになること。
○娘に関して、不登校があるので、相談ケースワークを通じて得意なことを見つけてあげてフリースクール、色々な就労・就学先というのがあるという情報を提供し、自分がどのような進路に進むべきなのかという目標を持ってもらうことが必要で、それが今後の生活基盤の安定、自立にもつながるという意見が出た。
○母親については、一旦学校教諭に家族のことを相談しているので、まずは家族それぞれが自立できるようになることが第一ではないかという意見が出た。
○母親については、全てはこの家族の問題が解決すれば幸せな状態になるのではないかという所もあるが、まずは母の健康を留意したり、お金の心配をなくすことが必要になる。また、家事も含めた仕事の負担軽減というのも計っていかなければいけない。健康面等を支えながら家族の問題が解決するというのが母の幸せにつながり、また父にパチンコ代やお酒等のお金を出さないという強い意志も必要ではないかという意見も出た。
○それぞれが心と体が本当の意味で健康な状態をめざすことが必要で、そのためにはそれぞれが相談できる場所を理解して、支援機関も信頼関係をつなげるような形で、それぞれに対してしっかり向きあえるような新機関を作っていく必要があるのかもしれないという話が出た。

■「ひきこもりの相談支援について」

《検討したシチュエーション》

◆家族構成、各人の状況

父：高齢者で無職だが、年金と不動産収入がある。
母：病気により死亡。
息子：40 歳代だが、ひきこもりとなっている。

《ストーリー》

地域包括支援センターのケアマネジャーが父の担当であるが、父は体調が悪く近く入院する予定であるため、ひきこもりの息子をどうしたらよいかわからない。息子は無職だが、父が年金の他に不動産収入があるため、経済的には困っていない。

◆あなたはどう考える？

この父と息子に対して、ストーリーの続きを想像して、次の点を検討してみてください。

①入院する予定の父が今後退院することを見込んで、どのような準備や支援が必要か。

②ひきこもりの息子に対して、どのように接し、どのような支援につなげる必要があるか。

①入院する予定の父が今後退院することを見込んで、どのような準備や支援が必要か。

○父親の体調がどれぐらい悪いのかというイメージがつかないが、入院する予定ということなのでそれほど悪くないのではないかというイメージを想定しながら話し合った。まず退院カンファレンスを行う際に可能であれば息子に参加してもらう。フォーマル、インフォーマルを含めた退院時の父親に合わせたサービスの検討する必要があるという意見や、地域の民生委員やボランティア等の支援者を増やす必要があるという意見が出た。

○一番大切なのは、父親が何を不安に思っているのかを知るということが大切で、まずアセスメントが重要だと思う。具体的には身体が大分悪いのであれば、介護保険を使うため介護保険制度の支援という形になる。この状況を見ていると、息子が引きこもりであり、父親を支えていくキーパーソンが見当たらないので、まずはキーパーソンを探すという作業も必要になってくる。もし支援の中でそれが見つけられなければ、成年後見人制度を使うという選択肢も出てくるという意見が出た。

②ひきこもりの息子に対して、どのように接し、どのような支援につなげる必要があるか。

○息子について、今どのような生活力があるのかをまず把握することが大事という話が出た。そのためには話をしっかりと聞いてもらえる人とのつながりが大事である。父親と息子については、経済的に不動産の収入があるので、不便さを感じていない中でこのような状況になっているのではないかという意見があった。今後どんな生活をしていきたいのか、父親は息子についてどう考えているかというのを引き出す必要がある。

○引きこもりの原因が何かという部分もあるが、息子が何を本当に望んでいるのかという所から話を聞くことが必要という意見が出た。引きこもっているということ自体が一概に不幸せにはならないかもしれないが、将来 60 歳、70 歳になった時に引きこもりだと、認知症等の問題が出てきた時に対処のしようがなくなるという部分もあるので、外に出てもらう支援をしていかなければならない。本人が本当にやりたいことを確認し、旅行に行きたいということであれば、お金は年金と不動産収入があるのでそれで行けるが、そういった自分の望みを叶えようとするとやはりもう少しお金が必要ということになる。社会に出て働いていかないといけないということを入口にして、何とか社会に出てもらうような工夫ができないか。父親を支える側に回ってもらい、自分の役割を見つけることで生きがいを感じてもらうのも重要な支援方法ではないかという意見が出た。

■「参加支援について」

《検討したシチュエーション》

◆家族構成、各人の状況

父（35 歳）：単身赴任で週 1 回程度しか帰宅できない。
母（35 歳）：障害の疑いがあり、仕事をしても続かず、自宅で落ち込んでいる。
娘（18 歳）：高校中退。母とのケンカが増えたため、家出を繰り返している。

《ストーリー》

父は単身赴任で不在がちだが、母と娘の仲がケンカばかりして良くないため、自宅に残っている家族が気がかりである。

◆あなたはどう考える？

この家族のストーリーの続きを想像して、次の点を検討してみてください。

①娘の状況の改善のために、必要な支援は何だと思うか。

②母が社会とのつながりを回復するため、必要な支援は何だと思うか。

①娘の状況の改善のために、必要な支援は何だと思うか。

○娘は自宅で落ち込んでいる母を見るのが辛いのではないか。それを含めた娘の今の気持ちに寄り添える人が必要という意見が出た。
○18 歳であるので、仕事に就いて社会の居場所を作ることもこの家庭内の問題につながるのではないかと考え、仕事に就ける援助やアドバイス等をしたらよいという意見が出た。
○SNS 等も活用したりパソコン等で顔を見て離れてても話したりすることができると思うので、父親に積極的に関わってもらうという意見が出た。

②母が社会とのつながりを回復するため、必要な支援は何だと思うか。

○父親は仕事をしているので、母親も仕事をしないといけないという生活の状況なのかと確認したり、どうしても仕事が続かず辞めるのを繰り返して落ち込んでいるので、長く続ける仕事にこだわらず、短期の仕事やできること等、母親の適正にあった仕事を選んでいけるような支援があればよいのではないかという意見が出た。
○娘が 18 歳で両親が 35 歳ということは 17 歳で子どもを産んでいることになるので、両親の親も家事や生きていく術を教え切れていない状況の中で子どもを産んだと考えられる。障害と書いているが本当に障害があるのか。むしろ生育の過程に問題があるのか等を考え、母親の生きていく力を得られるような仕組み、支援が必要なのではないか。

５．ワークショップのまとめ

（１）１日目

●地域の状況として、地域のリーダーや地域を支える民生委員・児童委員やボランティアの方のなり手が少なく、支え手が高齢化してきています。また、個人情報やプライベートな問題等への配慮から、支援が必要と考えられる世帯への関わり方が難しくなっています。
●公的な支援として、アウトリーチの充実や窓口対応の職員等の資質向上、相談しやすい体制づくりが求められます。
●地域での日常からのあいさつや声かけから、地域の状況を住民同士で気をつけることで、何気ない変化等に気づき、支援につなげることが必要です。
●サロンや居場所についてはメンバーが固定しがちで新たな方がなかなか入り込めない状況になることもあるので、どのような方でも参加できる雰囲気やきっかけづくりが必要です。

（２）２日目

■「複合的な課題を抱える家族への支援について」

●家族それぞれの悩みや状態を明確にした上で、それぞれの思いや意思をしっかりと受け止め、適切な支援やサービスにつなげることが必要です。
●世帯の悩みや課題については家族それぞれの状態がそれぞれに影響を与えるため、支援チームを結成する等して、支援チーム内で情報交換ができ、家族全体を支える体制を構築する必要があると考えられます。
●それぞれのライフステージや社会的立場等に配慮して、それぞれに応じた幸せの形と家族全体の幸せの形をあわせて検討する必要があります。

■「ひきこもりの相談支援について」

●高齢の父親に対して、息子との関係性に配慮しながら、退院後の在宅生活を支えるため、各種保険サービスや地域での支援等を検討する必要があります。
●息子については専門職等が話を聞ける関係性を構築した上で、ひきこもりから脱却できるきっかけづくりを行う必要が考えられます。

■「参加支援について」

●娘に寄り添って就労等のことを一緒に考えられる人の存在や、社会での居場所づくりが必要と考えられます。
●若くして子どもを授かった母親の境遇を勘案しつつ、社会への参加支援として母親の状態や適正に合った就労支援を行うことが必要と考えられます。